神奈川・香川（かがわ）・下寺尾（しもてらお）遺跡群

（下寺尾地区北B地点）

1　所在地　神奈川県茅ヶ崎市香川字北

2　調査期間　一九九九年（平11）七月～八月

3　発掘機関　香川・下寺尾遺跡群発掘調査団

4　調査担当者　戸田哲也・中村哲也

5　遺跡の種類　旧河道・祭祀跡

6　遺跡の年代　八世紀前期～一〇世紀前期

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、茅ヶ崎市内最奥部の砂丘列上、および調査区内を西流する駒寄川の開析により形成された沖積低地上に立地し、標高は現地表面で約八mを測る。また、本遺跡の北方約二〇〇mの微高地は、白鳳後期創建の寺院址とされる下寺尾廃寺の想定地である。下寺尾廃寺の存続年代については諸説あるが、創建期は七世紀末で、九世紀前期の改修期を経て、一〇世紀後期以前には焼亡していたものと現段階では考えられている。なお、本遺跡群の調査は土地区画整理事業に伴うもので、一九九五年度より開始し、現在も調査継続中である。特に下寺尾廃寺想定地の南側隣接地である下寺尾地区では、今回報告する調査成果を含めて、下寺尾廃寺に関連する多数の遺構・遺物が発見されている。

（藤　沢）

調査の結果、本地点の大部分は駒寄川旧河道であることが判明し、奈良～平安時代の遺物集中区が一一カ所で発見された。旧河道は新旧二条が検出され、いずれも概ね西流する。各遺物集中区は南側の一号河道内およびその周辺より検出されており、北側の二号河道からは遺物が出土していない。時期的には八世紀前期～一〇世紀前期の遺物が主体をなし、内訳は土師器（杯・皿・甕・高杯ほか）、須恵器（杯・皿・蓋・甕・平瓶・長頸瓶・浄瓶・円面硯ほか）、灰釉陶器（椀・長頸瓶ほか）、瓦、土製品（管状土錘）、金属製品（銅製鈴ほか）、皇朝銭（饒益神宝）、石製品（砥石）、木製品（木簡・付札状製品・曲物・槽・弓・櫛・田下駄・盆・椀・材・杭ほか）、漆紙文書、動物遺存体（馬骨・馬歯・昆虫類）、植物遺存体（種子類）である。墨書・刻書土器は約五〇点を数え、記載文字については「具」「大町」「田」「力」「高」「横」「病」「厨」「十」「〇」などが確認されており、さらに人面墨書土器（土師器杯）一点が含まれている。

木簡は、九世紀中期～一〇世紀初頭の遺物を主体とする一号遺物

集中区の東部より出土している。本遺物集中区は、調査区中央部の旧河道左岸から淀み部分（泥炭層下部～ラミナ層）にかけて形成されており、分布範囲は長軸約一一m・短軸約六mを測る。木簡は、ラミナ層上位（河床面より約五〇㎝）からの出土である。年代は共伴した土器などから、九世紀中～後期と推定される。一号遺物集中区からは、他に漆紙文書・皇朝銭も出土している。漆紙文書は九世紀中葉に比定される須恵器杯の内面に付着している。一次文書と推定される漆付着面については、文字の存在は確認できるものの、解読できなかった。二次文書と推定されるオモテ面には、「男」「見」「我」「尊」「若」などの文字が確認された。二次文書の性格については、文字の内容・書体、さらに同一文字が繰り返し表記されている点などから、仏典の習書の可能性が考えられる。皇朝銭は貞観元年（八五九）初鋳の饒益神宝で、木簡に近接して出土している。

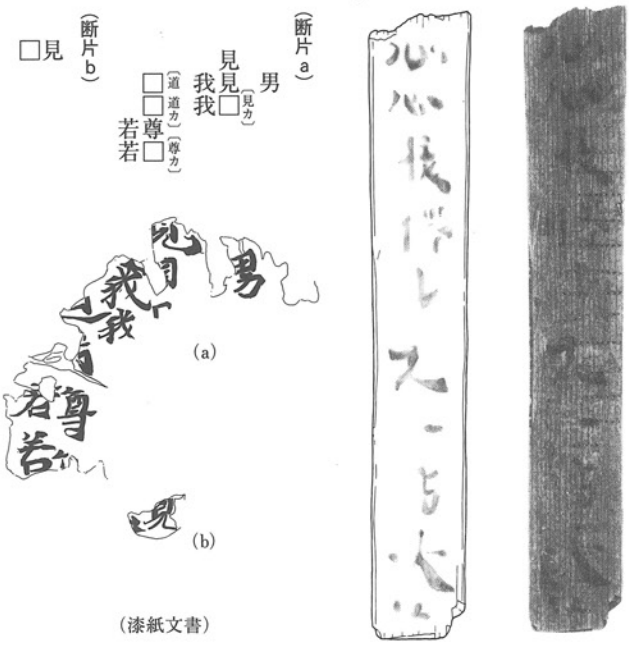
本遺跡の性格については、土師器杯・須恵器杯を主体とした濃密な遺物の分布、多量の木製品・墨書土器・刻書土器・馬骨の存在、漆紙文書・木簡・皇朝銭・人面墨書土器といった特殊遺物の存在、円面硯・浄瓶・長頸瓶といった仏器系器種の存在、加えていずれも河道内、および周辺より検出されている点などから、何らかの水辺の祭祀が前述の下寺尾廃寺と関連して、本地点で行なわれていた可能性を想定している。祭祀の具体的な内容は現段階では不明な点が多く、今後の重要な検討課題としたい。

8　木簡の釈文・内容

(1)　心心長□□□□大□」　(152)×24×5　019

樹種は杉で、上部を欠損する。木簡の性格は不明な点が多いが、同一文字の繰り返しが見られる点などから、習書木簡と推定される。

（中村哲也・大村浩司）



（漆紙文書）